

浜田温泉誕生秘話

馬場町 外山 健一

一 温泉館の由来

今から一二六年前の明治十二年（一七七九）、古市村（明治八年内竈村に合併）の高橋増吉氏が畑に植えている麦の生育が早いことを不思議に思い、そこを開掘したところ温泉が湧き出した。

初めは低温であったが開掘を続け、二、三年かけて公衆浴場として完成させた。その後二年（一八八九）に地元の名士、永田重郎氏（内竈国立第一町の永田一郎氏〈四七歳〉は玄孫）によって整備された。三五年（一九〇二）頃には御越町民（明治二年亀川・内竈・野田村合併、三五年町制施行）三、五〇〇人に対し年間約六万人を越える旅客が町を訪れ、その多くが浜田温泉に入浴したものとと思われる。

大正九年（一九二〇）町（永田卓爾町長）は、浜田温泉を木造二階建の浜田温泉館として改築した。一階は男女浴室と砂湯、二階が料亭であった。

二 指定管理者制度の先駆け

別府町は明治四〇年（一九〇七）二月一六日、町営温泉の運営管理を請負制年、請負人に管理させる案件を町議会に諮り決定した。御越町（大正一四年亀川町と改称）もこの制度を導入し、大正九年から昭和九年（一九三四）まで浜田温泉館の管理運営の一切を民間委託とした。管理運営を請負った民間人は浜田百合治氏（現別府市長浜田博氏の尊父）で、住み込みで浴場・料亭の管理運営に当たった。当時の賑わいから推せば、採算は十分にとれたと推定される。

三 別府市との合併を記念し改築

昭和一〇年（一九三五）九月四日、別府市と亀川町、石垣村、朝日村合併し大別府市が誕生、これを記念して浜田温泉館の改築が行われた。この建物の設計にあたったのが浜脇高等温泉を設計した別府市役所の技師、池田三比古氏である。

建物の外観は唐破風の上に千鳥破風を乗せた重厚な宮造りで、当時関東地方の和風銭湯に取り入れられて流行していた。氏はこれをいち早く浜田温泉の建築意匠として設計に組み入れたのである。この建物は建築以来六八八年間別府八湯亀川温泉のシンボルとして活用されたが、経年老朽化のため、平成



切絵 旧浜田温泉 和泉明朗氏提供

一五年（二〇〇三）解体除去されてしまった。

その前後から別府市民の間で旧浜田温泉建物を惜しむ声が高まり、この市民の熱い思いを知った元小学校教師の森田ミサ子さん（七五歳）が、建物復元費用として六五〇〇万円を市に寄付された。お陰で旧浜田温泉館は、『別府市浜田温泉資料館』として見事によみがえり、平成一七年（二〇〇五）八月二十九日、復元竣工セレモニーが盛大に挙行された。

今後、浜田温泉資料館は、別府の温泉文化遺産として、また温泉資料館として、その活用が期待されている。

お大師さま異聞

非会員 枝郷 大野 三十四

わが家へ通じる田圃道脇の入り口に、八七体のお大師さまを中心に九〇余体の石仏が祀られている。祖母の生前の話では、このお大師さまは、住所も氏名も分からない人が、願かけのために豊岡の石工に依頼して造った彫像で、完成後依頼主が受け取りに来ないまま、石工の家に保存されていたものだという。石工のほうでも、多数の彫像をそのまま置いた